

# ニーチェの比喩論

## ——1888年の断想から——

石井 慎一郎

### はじめに

ニーチェは「言語論」というものを、まとまった著作という形では著していない。もちろん「比喩論」といったたぐいのもも同様である。それゆえニーチェの言語についての考えは、「力への意志」や「永遠回帰」、「超人」などのセンセーショナルな、ニーチェの思想の中心とされる概念とくらべ、あまり重要性をもたないとされてきた。たしかに、ニーチェの哲学的テキストの複雑な問いに近づく手段としては、これらの「中心的」とされる大部分の方こそ、取り扱うべきかもしれない。しかし、「中心」をめざして、これらを取り扱ったものの多くが、けっきょくは「中心」に到達できなかったとするなら、別の協道を検証してみるのもひとつの方法ではないだろうか。

ニーチェの言語を扱った部分はこのような協道にあたるのかもしれない。まとまった著作としてでないとはいえ、ごく初期から末期の遺稿にいたるまで、丹念にテキストをたどれば、ニーチェにおいて、言語への関心が継続していたことは、疑問を差しはさむ余地がない。そして、これらの言語を扱った部分に、ニーチェの思想のきわめて難解なパズルを解く鍵が隠されていないとは断言できないだろう。

ニーチェが言語について述べる場合、多くは、学問批判、形而上学批判などのコンテキストに結びついている。そして、言語の本来の性質が修辞性、比喩性にあるとする考え方がそれらの主張の共通性としてあげられる。「真理」を錯覚としての本質が忘れ去られてしまった錯覚として批判すること、「真理」は使い古されて、もはや隠喩であることが忘れ去られてしまった隠喩であるとする主張は、その好例である。

隠喩の本来の性質を忘れ、隠喩の意味することを素朴に信じ込んでしまうことに疑問符を打つことこそ、ニーチェの試みたことである。それゆえ、ニーチェは言語のあらゆる比喩的性質を明かるみに出し、検討を加える。そして、こうした身振り

こそが、ニーチェの遠大で、不遜とさえ思われる「一切の価値の転換」、西欧の学問、哲学体系の揺るぎなき前提の転倒というもくろみへとつながるのであり、同時に、もしこうした区別が有効ならば、〈文学〉と〈哲学〉という異なった地点をめざすテキストが、いずれも言語によって書かれたものにほかならないとする主張となるのである。もちろんこうした主張をする場合、ニーチェ自身もまた、やはり言語の比喩性に深く囚われていることを、十分すぎるほど自覚していたといえよう。『ツァラトゥストゥラ』の扉に書かれた「Ein Buch für Alle und Keinen」という言葉は、ニーチェの言語に対するささやかな抵抗を表しているのかもしれない。それでもやはり、そのツァラトゥストゥラ自身に「つまりわたしは比喩でしか語れない」<sup>(1)</sup>といわせざるをえなかったところに、ニーチェの苦悩があるように思われる。

ニーチェは、言語あるいは比喩について語りうるいかなる例外的な場所、つまり言語に対して外在的で、特権的な場所も認めていない。こうした厳密な態度が、結局はニーチェを破綻へと追い込んでいったのかもしれない。

本論では、このようなニーチェの言語、とりわけ比喩についての考えをたどる手がかりとして、1888年の断想を主要な読みの対象としたい。なぜならば、すでに精神に異常の萌芽を感じ取りつつニーチェがしたためたこれらの断想は、われわれが読むことができるニーチェのテキストとしては、最も末期のものであり、またニーチェの死後に、クレーナー・ポケット版全集に『力への意志』というタイトルを与えられて収められたものだからである。それゆえ、ニーチェの意図はどうあれこれらのテキストは、ニーチェ思想の最終的通過点をわれわれに指し示すものである。これらを注意深く読み解くことは、ニーチェのめざす方向を策定するためには、ぜひとも必要な作業であろう。

## 1.

同時代にたいする批判者としてニーチェは、一見とるに足りないようなささいな混合性、妥協といったものをおそるべき忍耐強さをもって点検してまわる。たとえば、〈哲学〉は言語の比喩性を隠蔽しようと努め、〈法〉は言語の多義性を奪おうとする。また、諸学問における客観性への信仰、事実信仰の底流には、見えているかどうか判りもしない光景を見えているかのように錯覚させる言語の機能がある。ニーチェはおそらくここに、学問における「真理至上主義」<sup>(2)</sup>と、宗教における信仰との共通性を見いだしている。そして、この共通性とはまさしく、〈神〉によって解答がすでに記入された問題集をもとに質問がなされることの愚劣さ、貧困さにほかならない。

また、ニーチェのこうした点検は、「《真実らしさ》を嘲笑しうるはずの《確実性》なる概念の美しく幻想的な正体」<sup>(3)</sup>と、「できることなら不純な言語抜きでじかに思考の《中身》を手づかみにしたいという願望のせつない虚構性」<sup>(4)</sup>を根本的に問いなおすことでもある。

「哲学はいつも他の哲学をこそ仮想敵として原動力を得てきた（それらはいずれもおなじ反レトリック思想どうしだった）。それにもかかわらず、哲学の結果的な仮想敵はレトリックだったのである。——中略——レトリックは、じつは反哲学という不らちな潜在的思想であった。」<sup>(5)</sup>

西欧の哲学的伝統における「真理」が、比喩的言語の産物にすぎないこと、そして「思考が言語の迷宮的な迂回路を超出して真理を探求するというのは、自己を欺くことにほかならない」<sup>(6)</sup>ということ、主張することは、まさに「不らし」なスキャンダルであるにちがいない。

しかし、そのような身振りによってこそ、「プラトンから現代に至るまで、實質的に比喩的言語とのいかなる関わりあいをも否定した暴君的な理性の支配を維持しつづけ」<sup>(7)</sup>てきた哲学に一撃を加えることができるのである。

比喩性こそが言語の本質であるという考えは、ニーチェの死後、つまり二十世紀になってから明確に姿を現してくる。それらの逐一を詳細に述べることはできないが、たとえば、1936年にリチャーズが『レトリックの哲学』<sup>(8)</sup>で、レトリックはたんなる空疎な形式ではなく、思惟の本質的形式であることを指摘して以来、ピアズリーやヴァインリヒ、マックス・ブラック、リクールらによって、こうした考え方は、こんにちに継承される。彼らのめざしたところは、必ずしも同じではないとはいえ、言語の比喩性をその本質ととらえ、レトリックへの関心を喚起するという点で、その共通性を否定できない。ニーチェはいわば、彼らの先取りとしての性格をもっている。すでに述べたように、ニーチェにおいて比喩論は、道徳批判や、「神の死」といった多様なコンテクストにはめこまれており、それゆえ判りにくさを増しているともいえよう。しかし、これがニーチェの特徴ということもできる。そして、次のような一文を読むとき、ニーチェの攻撃目標がどこにあるのか、うかがい知ることができる。

「始まりをもった世界を構想する最後の試みが、最近論理的な手続きをふまえていろいろとなされてきたが、——たいがい、察しのつくように、神学的な下心によるものである。」<sup>(9)</sup>

ニーチェの「真の世界が虚構されたその土台となった一切の前提に対しての闘争」<sup>(10)</sup>によって、根源や真理を求める行為そのものが、たんなる道徳的なまやかしでしかなくなる。

## 2.

ここでは、ニーチェの比喩についての考え方を構成する部分のひとつ、「因果論的虚構」について、検討してみたい。この「因果論的虚構」は、ニーチェの数学的、論理的思考批判を読み解くさいの鍵でもある。

1888年の断想で度々くり返される因果律批判のなかで、とくに代表的なものが、「『内的世界』の現象論」という表題をつけられた一節である。タイトルから推察できるように、のちの「現象学」を先取りした批判であるかのようなこの節で、ニーチェは次のように書いている。

「われわれは、感官的感覚は外界によって生み出されるという幼稚な考えが行われているにもかかわらず、むしろ内界によって生み出されているということ、外界のあらゆる本来的な作用はつねに無意識裡にすぎさるということを知った……。われわれの意識にのぼる外界の部分は、外からわれわれに及んだ結果ののちにあとから産出されたものであって、後発的にその結果の『原因』として投影されたものである……」<sup>(11)</sup>

ニーチェはわれわれが苦痛を感じる時は、その原因は外部からの刺激によるよりむしろ、内部によって決定されるとする。このように、一見するとこの部分では、感覚受容、意識の問題のみを論じているかのように思われる。しかしながら、より注意深く読むならば、こうした部分こそニーチェが言語の本質に比喩性を発見する発端となっていることが判る。

議論はまず、伝統的なそして古典的とさえいえる二項対立から始められる。ニーチェの考えによれば、〈主体〉と〈客体〉という二項対立は、おそらく、〈内〉と〈外〉という空間的対立に依拠しているのである。ニーチェが試みているのは、この複雑にからみあった二組の二項対立について分析し、これらの対立の両極の序列関係が容易に逆転しうることを、示すことにある。

ニーチェは、外界の客観的とされる出来事は、内部の意識的な作用によって、決定されるのだという。つまり、客観的であると見なされていたもの、外的原因がじつは、それ自体が内的結果の帰結であるというのである。原因あるいは根拠が先にあり、そこから結果が導かれるのではない。じっさいは、まったくその逆であり、

原因は結果から推論によって導きだされるのである。ニーチェによって明らかになるのは、これまで〈原因〉と見なされてきたものが、じつは〈結果〉の結果であり、〈結果〉と見なされてきたものが、自らの〈原因〉の原因として機能しているということである。

「じっさいは、われわれは結果という図式にしたがってすべての原因を案出する。結果はわれわれに熟知されているからだ……。反対に何らかの事物について、それが何を『結果せしめる』かをあらかじめ言うことは、われわれの能力をこえる。」<sup>(12)</sup>

〈内〉と〈外〉という空間的な二項対立と、〈原因〉と〈結果〉という論理的二項対立は、固定した体系を作り上げているかのように考えられてきたが、じっさいは、順序もなく、相互に交換されうるものであることが判る。このことは、われわれが思考の出発点としていた図式に、またその図式に対する信頼に大きな動揺を与える。

### 3.

ニーチェはさらに、「『内的世界』の現象論」という断想において、さらに因果論的虚構には時間に関係していることを指摘して、次のように書いている。

「『内的世界』の現象論においては、われわれは、原因と結果の時間経過を逆転させる。『内的経験』の基本的な事実、結果が生じたのちに、原因が想像されるということである……。」<sup>(13)</sup>

「外部の原因が内部の結果を生む」という考え方、つまりわれわれが〈内〉と〈外〉、〈原因〉と〈結果〉という二組の二項対立を結びつけて考えることの底流には、ニーチェの分析によれば、時間経過上の〈前〉と〈後〉という一時的な二項対立がある。普通われわれは、時間的にも論理的にも〈原因〉が先にあって、その後〈結果〉があると考えがちである。しかし、じっさいに行っている手続きは、まず〈結果〉があり、その〈結果〉からしかるべき〈原因〉を構成するということである。このことをニーチェは「時間経過的逆転 (chronologische Umdrehung)」<sup>(14)</sup>と呼ぶ。ニーチェはこの「chronologisch」という語に、おそらくギリシア語の *khrōnos* (時間) と *logos* (言葉) という二つの意味をこめて使っている。

〈原因〉が時間的に先にあるべきだとすることの虚構性はもちろんのこと、時間

経過上の〈前〉と〈後〉、あるいは〈原因〉と〈結果〉の取り違い、交換は、言語の性質によって引き起こされる。そしてこのことは、ド・マンによれば「根源的原因という古い誤謬に結びつけられている」<sup>(15)</sup>のである。〈内〉と〈外〉、〈原因〉と〈結果〉という二組の二項対立は一貫したシステムではないばかりか、「因果関係と位置の属性は、相互に任意に交換され、代補している」<sup>(16)</sup>のである。この「代補と転倒の全過程」<sup>(17)</sup>は、ニーチェによって「言語的事象として考えられた」<sup>(18)</sup>のである。ここで述べられる「言語」とはニーチェが次の一節で言及しているような転倒と代用の戯れが起きるものことである。

「『内的経験』は、それがその個体の理解する一つの言語を見いだしたのちに、はじめてわれわれの意識の中にはいつてくる。……すなわちある状態が個体にとってよりよく知られた状態へと翻訳されたのちにおいてである。……『理解する』とはたんに次のことを意味するにすぎない。何か新しいものを何か古い、知れきったものの言語であらわすこと」<sup>(19)</sup>

言語の性質は、〈前〉と〈後〉、〈外〉と〈内〉、〈原因〉と〈結果〉といった二項対立の代置の可能性をもっている。「何か新しいもの」を「何か古い、知れきったものの言語であらわすこと」は言語において通常行われている手続きであるし、〈原因〉と〈結果〉の代用はメトニミーと呼ばれてもいる。ニーチェがここで『内的経験』、『理解すること』を、言語的な事象として言及していることは否定できないだろう。ド・マンもまたこのことは、「ニーチェがレトリカルな文彩を、あらゆる言語のパラダイムとして定義したやり方」<sup>(20)</sup>であると指摘している。ニーチェのこのような洞察は、次のような結論へと発展していくのである。

「すべての哲学は、どのように論理的もしくは理性的であるとしたところで、比喩的言語の変転するテキストに依存している。にもかかわらず、そのことが、真理の至上命令のもとに、体系的に抑圧されているのである。」<sup>(21)</sup>

論理的とされる図式がじつは、比喩的な言語に依存しているということ、そして形而上学的構築に、言語的修辞学的構造を見いだすところから、ニーチェの形而上学批判は始まるといえる。それゆえ「われわれは、ニーチェの形而上学批判の鍵——おそらく、誤読だと思うが今まではたんなる形而上学またはプラトンの転倒として述べられてきたのだが——は、比喩のレトリカルなモデルのうちに、またはもしこう言うのが好まれるならば、もっともレトリカルなものに根ざす言語としての文学のうちにあるということをも主張しうる」<sup>(22)</sup>のである。

#### 4.

場所と因果律の属性の交換、〈内〉と〈外〉、〈前〉と〈後〉、〈原因〉と〈結果〉といった空間性と時間性、論理性の不当な連合、あるいは交差と混同は、それが明らかにされるや否や、〈真理〉の尺度としての価値を失う。それゆえ、「因果律批判」、「時間経過的逆転」は、ニーチェにおいて〈真理〉批判と結びつけられているばかりか、〈真理〉を保証する〈神〉、世界の意味を保証する〈作者〉という考えに対する批判と結びついている。〈神〉という神聖なるものは、本来時間的につねに〈前〉に、そしてつねに〈原因〉の側におかれてきた。しかし、おそらくじっさいは時間の線状の連続性に〈後〉から任意に挿入されるのである。

「何だって？人間はたんに神の失敗作だって？あるいは神が人間のたんなる失敗作かもしれん。」<sup>(23)</sup>

〈世界〉の作者としての〈神〉は、この〈世界〉の成立の根源にはいない。時間経過的に前／後に分けて、〈神〉を〈世界〉に先行するものと見なすことはできない。

学問についても事態は同様である。自然科学にかぎらず、人文科学などにおいても「因果論的解釈 (Causalitäts-Interpretation)」<sup>(24)</sup>が行われている。たとえば、継起するさまざまな出来事を時間に沿って記述する歴史学は、あるひとつの事件について、「時間経過的」にあとから、その事件から派生してくる、あるいは明らかになってくる偶発事を原因と結果のもつれあった関係性のうちに位置づけ、統一性をめざすものである。

「ひとつの出来事に随伴し、それ自体すでにこの出来事の一結果である状態が、この出来事の『充足理由』として投影される。」<sup>(25)</sup>

また文学の研究においても、文学の影響を時間的に先のものから、後続のものへと及ぶととらえ、さらには〈作品〉を〈作者〉から読者への積極的な伝達であるとすると、これらの逆転は、ニーチェの批判を免れることはできない。

「原因と結果への信仰においては、肝心なものがいつも忘れられる。つまり、生起そのものが」<sup>(26)</sup>

ここでニーチェが「信仰 (Glauben)」としているところからも、強い批判であ

ることが判る。世界を生成するものとして考えるニーチェは、こうしたやり方では生成発展しつつある世界は捉えきれないとする。

「事実、学問は因果性という概念からその内容を取り去り、それを一つの等式として残した。そこでは結局どちらの側に原因が、あるいは結果があるかは、どうでもよいことになった」<sup>(27)</sup>

ニーチェは、学問においては〈原因〉と〈結果〉は等式で結ばれるようになると分析する。〈原因〉は結果であり、〈結果〉は原因であるということである。つまり、等式で結ばれるということは、左右の項は相互に入れ換えても等式の関係は変わらないということであり、相互にいとたやすく代置される、互換性のあるものだけということになる。これこそ言語の比喩の等式／慣用 (Gleichnisformel) にほかならない。

「作りだされた原因のかわりに、外界に客観的存在をもっているかのように装う」<sup>(28)</sup> 時制的図式を取り除き、言語から、比喩的性質を取り除くことによって、認識論的に信頼性のある言語を作りだそうとすることさえ、やはり欺瞞である。こうした考察から、次のようにニーチェは結論づける。

「隠喩なしの『本当の』表現もないし、本当の認識もない。」<sup>(29)</sup>

ニーチェのこうした主張は、リチャーズが『レトリックの哲学』で述べた「隠喩は言語の普遍的な原理」<sup>(30)</sup> であるという主張を先取りしているともいえる。しかし、ニーチェは、言語が比喩的であるからといって、すべてを文学的意味に収斂すればよいとしているわけではない。批判されるべきは、「解釈を本文と取り違える」<sup>(31)</sup> ということであり、比喩の「非-真理」という性質を忘れることである。

## む す び

たとえば、日本語においても〈前〉と〈後〉が、時間経過における位置関係と、空間におけるその両方において用いられるように、〈原因〉と〈結果〉という二項対立は、〈前〉と〈後〉という時間的二項対立と、〈内〉と〈外〉という空間的二項対立に依拠するものであった。さらにニーチェは「根源的な原因という虚構性」を告発する。そしてその虚構は、言語の性質に根ざすものであった。原因／結果という〈論理〉は、したがって思考の過程を反映しているものではなく、まったくあ



てにならないものとなる。すべては「転倒と代用の戯れ」<sup>(32)</sup>のおきる言語の網の目に深く捉えられ、自由を奪われている。しかし、このような主張をすることは、同時にニーチェ自身の立場さえ危ういものにする。ニーチェのこうした主張自体が、真と偽のあいだに宙づりにされてしまうのである。そうなったとき、この主張は数多くの解釈のうちのひとつにしかすぎなくなる。ニーチェは1888年の断想で、こう書かざるをえない。

「解釈の中には、真実と誤謬が含まれている。」<sup>(33)</sup>

言語が本質的に比喩であることを認めるということは、このニーチェの断想のように、相互に矛盾しあういくつかの解釈を、同時に受け入れることである。しかし、このようにニーチェがレトリックにおける比喩にのみ注意を集中し、言語の正体を明らかにすることは、ド・マンによって批判される。

ド・マンは、雄弁術あるいは説得術としてのレトリックを切り捨てることによって、導きだされてきた主張が、とりもなおさず雄弁術、説得術を必要としているのだとする。しかし、このド・マンの批判にもかかわらず、ニーチェは自らの主張もまた、唯一真正のものではありえず、多様な解釈うちのひとつにすぎないということに、おそらく気づいていた。それが『善悪の彼岸』の22節において付加された留保「——これもまた一つの解釈であるにせよ——」<sup>(34)</sup>に表れているのではないだろうか。このような立場をとるとき、自らの解釈の正しさを、優越性を主張するために説得術が必要となる。

解釈が多数あることが判らず、提示された解釈が、他と競合することがないために、必然的解釈とされるあいだは、説得術は不要である。しかし、〈真理〉の保証としての〈神〉が消滅したとき、解釈の違いをめぐる議論が生じたとき、説得術の必要性が生じる。したがって、言語の比喩性についての検討と主張は、説得術と切り離せないものである。

これらの事情をニーチェ本人が判っていたかどうかは不明である。しかし、われわれがこんにち接することができるニーチェのテキストから判断するかぎりでは、ニーチェがこのことを承知していたことは、十分考えられる。多くの著作におけるニーチェ独特の語調や、反語、列叙法の多用、同一のフレーズの執拗な反復はその証左であり、あの『ツァラトゥストラ』の物語は、ニーチェ自身の意図を越えて、十分説得術たりえているのではないだろうか。

ニーチェの発する言葉を、レトリカルなものとして読むかぎり、それらの言葉は多義的であり、説得術のレトリックとして提示されている以上、ニーチェの主張、

解釈は真でも偽でもない。それは、永遠に仮設／仮説としての性格をもったままで、真か偽かを問うことを停止せよとの〈説得〉である。

### 【註】

使用したテキストは以下のとおりである。

F. Nietzsche: Nachgelassene Fragmente Anfang 1888 bis Anfang Januar 1889.

In: Nietzsche Werke Ⅷ-3, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1972. (以下断想と記し、アフォリズム番号によって引用箇所を示す)

なお本文中の日本語訳については白水社版全集のほか、『善悪の彼岸』については新潮文庫版を参考にさせていただいた。

- (1) Nietzsche, F.: Nietzsche Werke Ⅵ-1, Berlin (de Gruyter) 1968. S.243
- (2) Nietzsche, F.: Nietzsche Werke Ⅵ-2, Berlin (de Gruyter) 1968. S.417 (以下Ⅵ-2と略す)
- (3) 佐藤 信夫: 消滅したレトリックの意味 (『思想』No.682, 岩波書店 1981, 2～23頁), 23頁
- (4) 同書 23頁
- (5) 同書 22頁
- (6) Norris, Ch.: Deconstruction — Theory and Practice, London/New York (Routledge) 1986. P.57 (以下ノリスと略す)
- (7) ibid. P.57
- (8) Richards, I.A.: The Philosophy of Rhetoric, Oxford U.P., 1950. 参照 (以下リチャーズと略す)
- (9) 断想. 14-188
- (10) 断想. 14-103
- (11) 断想. 15-90
- (12) 断想. 14-98
- (13) 断想. 14-90
- (14) 断想. 15-90
- (15) de Man, P.: Allegories of Reading, New Haven/London (Yale U.P.) 1979. P.108 (以下ド・マンと略す)
- (16) ibid. P.108
- (17) ibid. P.108
- (18) ibid. P.108

- (19) 断想. 15-90
- (20) ド・マン P.108
- (21) ノリス P.58
- (22) ド・マン P.109
- (23) 断想. 15-118
- (24) 断想. 14-98
- (25) 断想. 14-81
- (26) 断想. 14-81
- (27) 断想. 14-98
- (28) ド・マン P.110
- (29) Nietzsche, F.: Nietzsche Werke III-4, Berlin (de Gruyter) 1978. 19-249
- (30) リチャーズ P.92
- (31) 断想. 15-82
- (32) ド・マン P.108
- (33) 断想. 14-57
- (34) VI-2. S.31